

産婆世界解体プロセスにおける

「自己改造」とドメスティシティー

鈴木 七美

——十九世紀中葉アメリカ水治療運動の出産言説

はじめに

十九世紀前半期アメリカは、「家庭性 (domesticity)」がさかんに喧伝され、家族史・女性史研究者メアリ・ライアンのいわゆる「母の帝国」が成立する時代であった。⁽¹⁾つまり、女性近代な〈母〉へと取り込まれ「家庭性」のなかに繰り入れられていったのである。この時期は同時に、出産の歴史において助産の担い手が産婆から医者へ移行するという一大変動期でもあったが、〈母〉の浮上という事態は、子育てはもちろん出産の変化とも深く関連していた。

本稿は、このような産婆世界解体プロセスにおいて、近代的産科医の手に助産を委ねることに異を唱え、女性に対し、自ら「自然な出産」を達成する主体となることを勧めたハイドロパシー (Hydropathy、水治療運動) の出産言説を検討する。そのことよって、十九世紀中葉期の「自然出産運動」の主体意識が、産婆世界解体プロセス⇨変動期の過渡期的性格を刻印され歴史的に特異なものとして出現すること、そしてそれは、都市化・産業化のうねりのなかで、身体や人間関係に関する都市的態度の一側面として登場することを明らかにしようとするものである。

一 アメリカにおける産婆世界解体プロセスとハイドロパシー

1 アメリカにおける出産の歴史的变化

アメリカの出産の歴史には、二つの大きな変化がみられる。第一は、十八世紀後半から十九世紀なかばにかけて助産者が産婆から医者へと移行したことであり、第二は、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて出産の場所が産婦の家から病院へ移動したことである。なかでも北東部都市の上・中流階層では、産婆から医者への移行が急速に進行し、出産をめぐる習慣が大きく変容した。⁽²⁾ まさに十九世紀アメリカは、出産の歴史の変動期だったのである。

こうした出産の歴史的变化に関しては、一九六〇年代末より、社会史研究興隆のもとに、おもに女性史・家族史・医学社会史などの分野で研究が蓄積されてきた。⁽³⁾ それらの研究は、出産史をたんに産科学の発展の歴史として記述するのではなく、出産のありかたを社会・文化との関連において捉えようと試みてきた。だが、出産の医学化過程が社会変化との関連で検討されてきたとはいえず、これら膨大な研究成果からしてもいまだ十分ではないと考えられる点⁽⁴⁾がいくつか指摘できる。第一は、出産の歴史的变化の底流をなす出産観の変容を説明しようとする試みが不十分であること、第二は、出産の歴史の変動期においてその故に生ずる出産をめぐる人間関係的・心的葛藤の内在的分析に欠けること、そして、第三は、出産の変化を眼前にして活発に意見を述べ、出産に関してそれぞれ独自のオルタナティブを提示していたセクタリアンが存在したにもかかわらず、彼らの出産言説に着目した研究がみられない点である。セクタリアンの言説に注目することは、上記第一・第二の課題を解明する点でも重要である。

2 産婆から医者への移行期におけるセクタリアン運動

十九世紀前半から中葉にかけてのアメリカでは、非正統治療者たちに率いられた一連のセクタリアン運動が興隆した。

これは、ポピュラー・ヘルス・ムーヴメントとも総称されており、医療における近代化・専門職化という変動期にあって、新たに台頭してきたレギュラー・ドクターと呼ばれる一群の近代医者に対抗し、癒しのありかたを問い直しセルフ・ヘルプをめざす運動であった。⁽⁵⁾ なかでも出産における変化を問題として「自然な出産」を提唱したのが、一八一〇年代から一八三〇年代にかけて広範な地域で人気を博したトムソニアニズム (Thomsonianism 植物治療運動)、および十九世紀中葉にとりわけ北東部都市の女性たちに支持されたハイドロパシー (Hydropathy 水治療運動) である。⁽⁶⁾

トムソニアニズムは、ニューハンブシャーの農夫サミュエル・トムソンが創始したハーブをもちいるボタニカル・ムーヴメントである。トムソンは、近代医者が登場する以前のアメリカの治療世界を理想としており、助産に関しても、医者に頼らずふつうの人々がカイエン・ペパーやロベリアなどのハーブで身体の「自然」を援助することを勧めていた。

これに対し、同じく近代的産科医の助産を強く批判していたハイドロパシーは、都市化・産業化が顕著であったアンテベラム期 (南北戦争前) のアメリカで、もはや「自然」の力に頼るだけでは不十分であるとの認識から、新たな時代を生き抜くためのセルフ・ヘルプのかたちを模索することになる。本稿は、このハイドロパシーの出産言説を素材として、産婆世界解体プロセスにおいてセルフ・ヘルプを支える主体がどのように語られ、いかなるゆらぎを内包せざるを得なかったかを考察するものである。

アメリカ・セクタリアン史研究も出産史研究同様、一九七〇年代以降に急速に対象を拡げ活発化した医学社会史の分野で蓄積されてきた。ハイドロパシーに関しては、レーガンがこの運動の展開を後づけ、ドネガンはヘルス・リフォーム運動としての諸局面を検討し、ケイレフはハイドロパシーの女性たちへの影響を考察している。⁽⁷⁾ しかしながら、いずれの研究も、社会的文脈の中での出産言説のゆらぎに十分に関心を払っていない。総じて、出産の医学化プロセスにおける葛藤・変動のダイナミズムを説明する試みは未着手のままである。この問題領域を、これまで独立に行われてきた出産史とセクタリアン運動史とを結びつけることによって、開拓することが求められているのである。

二 ハイドロパシーにおける「出産問題」の認識

1 ヘルス・リフォーム運動としてのハイドロパシー

水治療法 (water-cure) は、オーストリアの一農夫V・プリースニッツが、医者に見放されるほどひどく肋骨を骨折したときに、水に浸した布を自分で巻き治療したことに始まる。プリースニッツは、家畜にも水治療を適用した。グレーフェンベルクにつくられたプリースニッツの水治療所は「水大⁸学」とも呼ばれ、ヨーロッパ各地から人々が訪れ人気を博したとされる。アメリカには、レギュラーの治療方法にあきたらずプリースニッツに傾倒した医者ジョウル・シユーによつて一八四〇年代に導入され、一八四三年には、彼と妻のマリーによつてニューヨーク市に初の水治療所が開設された。⁽⁸⁾だがハイドロパシーと呼ばれるアメリカの水治療法は、病氣治療にはとどまらず、広範なヘルス・リフォーム運動として発展した。そのスローガンは次の言葉に集約されている。

我々の国と世界に広がりつつある健康における輝かしいリフォームの原理とは何か。それは水治療であり、薬によつて毒することを憎むことである。それは自然に帰ることであり、自然の法則 (laws of nature) を理解することである。⁽⁹⁾

ハイドロパシーの中心的刊行物『水治療ジャーナル (Water-Cure Journal)』誌上でのこの宣言は、水治療がヘルス・リフォームの大道であり、それが近代的治療に抗し「自然に帰る」ことを意味していること、そのためにはなによりも「自然の法則」を理解することが不可欠であること、を謳い上げていた。

「自然の法則」を広く知らしめるために重要な役割を果たしたメディアとして、二十種以上にもぼる雑誌や指導者たちによるマニュアルが刊行された。なかでも二十世紀初頭まで出版され続けた『水治療ジャーナル』は、アンテペラム期の雑誌のなかでも最も多くの購読者を獲得していたものの一つであり、⁽¹⁰⁾読者の寄稿欄も充実していた。

また、ニューヨーク、マサチューセッツ、ニュージャージー、ペンシルベニア州などを中心にアメリカ全体で二百以上も設立された水治療所は、治療を受けるだけではなく、ヘルス・リフォームを学ぶ場でもあった。シューは、「すべてのハイドロパシーの治療所を、ある意味で教育的なものとしなければならない。∴水治療所は学校——学びの場所——であるべきだ。」⁽¹¹⁾と水治療所への思い入れを語っている。

したがって、水治療所では講義も行われていた。禁酒運動、奴隷解放運動など、同時代の様々な改革運動を担うハイドロパシストが、講師を務めた。ヴェジタリアニズムと節制を説いた牧師シルベスター・グラハム、ブロンソン・オルコットのいとこで医者かつ教育者のウィリアム・オルコット、骨相学に親しみ『水治療ジャーナル』の出版も手がけたニューヨーク市のファウラー家の人々などもハイドロパシーの支持者だった⁽¹²⁾。水治療とはまさにリフォームの思想であった。『アメリカ女性の家庭 (American Woman's Home)』(二八六九年)の共著者で、著名な教育者キャサリン・ビーチャーおよび『アングル・トムの小屋』で知られるキャサリンの妹ハリエット・ビーチャー・ストウなどもハイドロパシーの熱心な信奉者だった。こうしてハイドロパシーは、ニューイングランド、ミッド・アトランティック、オハイオ河流域のおもに都市部を中心として支持者を集めていった。

2 「文明化」過程における出産問題の浮上

「自然に帰る」ことを謳いトータルなヘルス・リフォーム運動をめざしたハイドロパシーが、身体をめぐる問題のなかでもとりわけ出産に注意をはらったのは、この時期とくに女性の身体が衰弱していると観察され、その原因の一つに、十九世紀中葉の都市部ですでに一般的となっていた医者(レギュラー・ドクター)の助産があるとみられたからである。

改革を必要とする医学があるとすれば、それは出産において女性を「科学的」に扱うことである。∴葉づけ、恒常的な介入、そして自然の過程を妨げることが、出産を危機の時にしてしまった⁽¹³⁾。

当時の医者は、瀉血やアヘンを用いる「ヘロイック・セラピー」を施し、不適切な鉗子の使用などによりしばしば産婦の

身体を傷つけたので、「おせっかいな助産術」と批判された⁽¹⁴⁾。

だが、ハイドロパシストが憂慮していたのは、医者による助産のみではなかった。メアリ・ニコルズは、「贅沢文明 (Excessive civilization) が、すべての病氣とりわけ妊娠と出産における病氣を増加させている」と指摘していた⁽¹⁵⁾。「贅沢文明」とは、コーヒー・紅茶などに代表される嗜好品や、腰をコルセットできつく締めつける優雅なファッションなど、戸外の労働から解放され都市に住む女たちが身につけた新しい生活習慣一般を指す。それら「都市的態度・習慣」は、「自殺的流行病」だと断罪された。ハイドロパシストは、医者の助産のみならず全体的な生活様式の「文明化」によって、女性の「自然」の力が衰退していると危惧していたのである。

とはいえ、出産問題に焦点が当てられていたのは、自然の衰退という情況認識による危惧からばかりではない。出産問題に代表される女性の健康を著しく損なう要因を解決することは、女性の「第一の偉大な権利」にはかならなかつたのである。

女性が、彼女の第一の偉大な権利 (her first great right) 、すなわち健康への権利 (the right to health) を学びこれを要求することを求めなければ、女性の領域 (woman's sphere) が大きく上昇することはありえない⁽¹⁷⁾。(傍点筆者、以下同様)

女性の権利としてはさらに、看護、家庭の守護者たること、女性の役割 (woman's part) をまっとうすることなどがあげられていた⁽¹⁸⁾。女性の「第一の偉大な権利」として「健康への権利」を獲得することは、「女性の領域」で十全な活動をするための第一歩であつた。

3 「健康への権利」の自覚と〈母〉

「女性の領域」を上昇させるためには、まず、妻としての役割を果たすことが不可欠である。ハイドロパシーにおける妻のイメージは、アンテベラム期アメリカで上中流階層の女たちに期待されたヴィクトリア的女性像とは対照的であつた。

「婦人服の型が女性と男性の間に障壁をもうけている」としてアメリカン・コスチュームを勧めたハリエット・オースティンは、その理由を、「男性の足手まといとなる女性は、彼にふさわしい道連れではない」からと説明した。神は、「いつでもどこでも、男と女が仲間として協力しあう (companionship) ように創った」⁽¹⁹⁾のであると。

夫を支え家庭の要として生きる女性のいま一つの重要な役割は、子どもの養育である。アンテベラム期アメリカは、愛情で緊密に結ばれた近代情愛家族が結晶化しつつあった時期でもある。生産労働から離れ都市部に住む男女の性別役割分担はより鮮明となり、妻・母の役割は、外界から遮断されたスイート・ホームをいつも用意しておくことであつた。

子育てにおけるおとなの責任は、ハイドロパシーにあつては次のように自覚されていた。

国家にとって可能なかぎり最も活気ある美しい国民を保証するため、…あらゆる身体障害や醜さを治すための最

も良い方法を提供し、子どもの健康と強さ、そして美しさを増進するために、より賢く人間的な方法が、すべての新しく生まれる子どもに対して適用されなければならない。⁽²⁰⁾

これは、「子どもはわれわれ「おとな——角括弧内筆者、以下同様」が形を変えられる柔らかな粘土のようなものであり、彼らの精神と同様、身体の運命もわれわれの手の中にある」という子ども期についての認識によつて支えられていた。⁽²¹⁾

子育てにおいて、大きな影響力をもち最も重い責任を担うのは、母親であつた。子どもに病氣や身体障害が出現した場合、それは「子どもが生まれるものものが不完全であつたか、あるいは誕生前に受けた何らかの望ましくない印象 (impression) によるもの」⁽²²⁾とさえ考えられた。産前から母親の健康管理が注視の対象となつた。

健康な子どもが誕生した後も、母親の責任は軽くなることはない。

正常な空気、適切な種類の正常な食物。一年目の子どもは健康で愛情に溢れた母親の乳のみを必要とするから、母親の食養生は厳しく注意されなければならない。…十分な睡眠、温かさ、光、清潔のための入浴、運動、すべての機能の活動における規則正しさ。知性の育成。母親は、子どもが生まれたそのときからこれを行なう。…お伽話、詩、歌、ゲーム、絵。子どもの絶え間ない問いかけへの思慮深い答えは、子どもの精神を健全に活気づけ、調和の

とれた発達を促すだろう。愛情を育てること。やさしい性質と愛情に溢れた雰囲気は健康と美に最も大きな影響をもつものである。⁽²³⁾

「愛情にあふれた母親の乳」を与え、子どものうちに健康と美の源泉である「愛情」を育てなければならぬ。そのさい子育ての本道は、「自然」(Nature)を研究し、その傾向を学び、「自然」が目標としている『完全』(Perfection)に到達するために、「自然」を援助する⁽²⁴⁾ことにあると説明された。

「自然」の正しさあるいは完全性を確信するハイドロパシストは、それゆえ、メアリ・ニコルズのように、「健康の規則と条件を研究しないものは妻や母として失格である。」⁽²⁵⁾と言いつ切ることになる。サラ・セルビーは、「女性が不健康な個人的習慣を捨てるまで、社会の変容に関して実質的な責任を果たすことはできない。」⁽²⁶⁾と述べ、女たちがとりわけ出産や子育てを視野に収めつつ自らの健康を管理することを、へ母⁽²⁷⁾たるものの社会的責任として自覚することを求めた。そして、出産は、そうしたへ母⁽²⁷⁾へと変身を遂げる転機として重視され、焦点的課題としてクロース・アップされた。まさに、「出産は女性の浄化 (purification) の時なのである」⁽²⁷⁾。

三 準備治療による「第二の自然」の構築

1 ハイドロパシーにおける「自然」な出産

「浄化の時」たる出産本来の姿としては、「自然」な出産が想定されていたが、それは介入を一切必要としないものを意味していた。出産に深い関心を寄せていたシューは、植民地時代アメリカや、十九世紀中葉に至ってもインディアンや労働階層においては、「自然」な出産が実現されているとみていた。⁽²⁸⁾

「自然」な出産の表徴は、ハイドロパシストにあつては、「痛み」を感じないことである。トマス・ニコルズは「痛みは病気のしるし」⁽²⁹⁾と述べ、トロールも、「出産の痛みは不健全な感受性」だとして「痛み」を否定的に捉え、「健康的な生活

をしている女性はほんの少しの痛みしか経験せず、その反対の習慣をもつ女性は最もひどい経験をする。」と断じた。⁽³⁰⁾ こうして「痛み」は、悪い習慣に溺れていることを露わにする信号という意味をもつことになった。

出産に際して「痛み」を感じない方がよいという考え方は、歴史上必ずしも一般的なものではない。十九世紀中葉のアメリカでは、他の地域に先駆けて出産時に麻酔が用いられたが、他方で、植民地時代から十九世紀前半期まで出版され続けた産婆術指南書『アリストテレスの傑作 (Aristotle's Masterpiece)』では、「本物の痛み」が出産には不可欠であることが強調されており、その「痛み」の見分け方が詳しく説明されていた。⁽³¹⁾ また、そうした産婆術を伝統として復興することを唱えたトムソニアニズムにおいてもやはり、出産にあたって「本物」の痛みを見分けることが必要不可欠であると指摘されていたのである。⁽³²⁾

だがハイドロパシーにおいては、「痛み」は個人的な不摂生への罰という位置づけをされるに至ったのである。さらにハイドロパシストは、出産を「単に自然なだけでなく、肯定的な意味をもつ健康なできごと」と捉えるべきであると述べていた。⁽³³⁾

しかしながら、現状は、こうしたハイドロパシストの理想とは裏腹な状況にあった。トマス・ニコルズは、「最近」自然な出産に出会うことはほとんどない。少数のそれ「自然な出産」は水治療によって培われた『第二の自然』(second nature)によるものである。⁽³⁴⁾と述べ、かつてみられた「自然な出産」がもはやほとんど実現不可能となっていることに言及した。この時期に「自然な出産」を達成しようと望むなら、そのためには水治療によって『第二の自然』を構築する必要があるというわけであった。

2 ハイドロパシーの生活術とヘルス・リフォーム

ハイドロパシストの言う「第二の自然」とは、文明化の過程で衰弱しきったかつての「自然」にかえて、新たに創りあげられる「自然」である。新たな「自然」の効用は、「産前の準備的水治療を女性自身が行なえば自然は「出産という」試験に際

し女性を元気づける。」⁽³⁵⁾というトマス・ニコルズの言葉に表現されている。準備治療の指導者シューは、「出産に伴う不幸や危険はかなりの程度人間がコントロールできる」⁽³⁶⁾と言いつつ切っていた。

準備治療とは、水浴、運動、食養生を中心とした規制的な養生術である。虚弱で出産も困難をきわめた妻マリーを診た経験から養生術を編み出したシューは、これを、「水、新鮮な空気、日々の運動と休息、食養生、果物と小麦を中心としたヴェジタリアニズム、コーヒー、紅茶などの刺激物を避けること」についての賢明な規制を守る」⁽³⁷⁾ことと説明していた。

こうした養生術により達成された「自然な出産」の典型として、ウェブスター夫人の例があげられる。⁽³⁸⁾ウェブスター夫人はロード・アイランドの富裕な家に生まれ、十歳代後半にはコレセットの入った服の着用と運動不足から脊髄を痛め、レギュラー・ドクターの治療を受けたがいつこうによくならず、心配した母親は贅沢な食事を与え続け、病状はますます悪化した。その後、トムソニアン・ドクターである夫と結婚し、植物治療によって健康を取り戻したが、流産によって再び体調が悪化し、妊娠を機にロング・アイランドのオイスター湾にあるシューの水治療所に夫とともにやってきたのである。

オイスター湾の水治療所のスケジュールは、以下のとおりである。起床は午前四時。濡らした布でさすってもらうラビング・ウェット・シート (rubbing wet sheet) と呼ばれる水浴を行う。これは、妊娠・出産時に最も適した緩和な水浴方法とされる。その後、天候にかかわらず運動や散歩。雨が降れば雨浴となる。朝食は午前六時から七時。野菜、果物、ミルク、無漂白の黒パンなどを摂る。油の多い肉やバター、コーヒーや紅茶、タバコ、葉やアヘンなどは禁止。朝食後、水浴。昼食は十二時にヴェジタリアン・ダイエット。その後、再び水浴と戸外での運動。夕食は午後六時。九時にラビング・ウェット・シートや座浴を行い就寝。

このようにシューの処方箋にしたがって養生に努めたウェブスター夫人の次の出産は、ごく軽いものであった。四時に起床すると軽い痛みを覚え、いつもどおり水浴すると、八時三十分には大きな男の子が誕生した。正午には夫に助けられて水浴。黒パンと生のココモモの昼食。ベッドに横になつてばかりいないで部屋の中を歩き回って体力の回復をはかった。

二日目以降は、夫と馬車で新鮮な空気を吸いに出かけることが付け加わり、ほどなく夫人は、プロビデンスに帰宅できるほどに回復した。

ウェブスター夫人の分娩自体は、誰の援助をも必要としない、「痛み」のない「自然な出産」であつた。見守るのは夫とハイドロパシーの専門医。産前産後の水浴を援助したのは夫である。夫が妻を助けると、精神にもよい影響を与えられた。

オイスター湾の水治療所の養生術は、産前産後の女性に薬を与え二ヶ月間もの安静を命じたレギュラー・ドクターの助産とは対照的である。産婦には、運動して体力をつけることが勧められた。食事は油分の多い贅沢なものは避け、ヴェジタリアンに徹することが定められていた。十九世紀中葉には一般的となつていた漂白パンではなく黒パンが、また、食品はできるだけ調理せず無添加状態で摂ることが望ましいとされた。文明化の弊害とされる、誤つた生活習慣や医者への介入が徹底的に排除されたのである。

四 ハイドロパシーにおける都市的態度と〈母〉のゆらぎ

以上のように、産婆世界解体プロセスにおいて、女性の「健康への権利」の強烈な自覚の下、「自然な出産」の実現を焦点的課題として追求したハイドロパシーは、しかし、過渡期に特有な矛盾を背負い込むものでもあつた。ハイドロパシーが、レギュラー・ドクターの介入を批判していたことは当然のこととして、他方でそのめざすところは、奇妙に思われるかもしれないが、かつての伝統的産婆世界から遠く隔たつた世界だったのである。出産に関するハイドロパシーの言説の特徴を捉え返しつつ、その過渡期的様相と矛盾を浮かび上がらせてみよう。

1 「文明化」のただなかで「自然に帰る」

なによりも第一の特徴は、「自然な出産」を標榜したハイドロパシーの「自然」は都市化・文明化過程で衰退しきった「自然」にかわる新たな「第二の自然」として構想されざるを得なかった、ということにある。「自然に帰る」と言いつつも、しかしその自然は新たに構築されねばならなかったのだ。そこに、「健康」が絶対的価値として強烈に意識され、「健康への権利」が殊更に強調されねばならなかった所以がある。

ハイドロパシーのこうした過渡期ゆえの矛盾は、ハイドロパシーにとって欠くことのできない「水」をめぐって端的に指摘され得る。「水」に関してシューは、「シレジアの山中で清浄な水が甘コウやアヘンよりずっとよいというのなら、ロンドン、パリ、ニューヨークでも同じはず」と請け合い、「クロトン、シュイルキル、コチテュエイトなど良質の水を得られるようになった地域では：新しい方法（ハイドロパシー）の実用性がすでに証明されている」と宣言していた。⁽³⁹⁾

ところが、クロトン、シュイルキル、コチテュエイトの良質な水とは、十九世紀前半から中葉にかけてあいついで敷設された、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンの水道水のことなのである。ロンドンでコレラの元凶として井戸が告発され、フィラデルフィアで一八三二年の水道敷設後にコレラ流行が退潮傾向を示したことなどを見据えて、ニューヨークでも文明化のシンボルたる水道建設をめざす大クロトン計画が進められた。⁽⁴⁰⁾ ハイドロパシーにとっての理想の水は「清浄な軟水」であるが、「文明化」過程にあつた都市ニューヨークで最も良質の水としてシューによって推奨されたのは、一八四二年に漸く完成したクロトン水道によってマンハッタン北方四十マイルのクロトン天然貯水池から供給されるようになった水道水なのであつた。

つまり、「自然に帰る」ことを掲げたハイドロパシーにおける「水」は、そこかしこに自然に湧き出ている水ではなく、「文明化」の産物たる人工的「自然」にほかならなかつた。ハイドロパシーにおいて、「自然に帰る」ことは、植民地時代に日常的に行われていたハーブの収集や、トムソニアニズムにおいて謳われたアメリカに自生するハーブの効用の見直しとは、すでに遠く離れた地点に立っていた。

2 セルフ・ヘルプにおける自己形成主体の脆弱性

ハイドロパシーがレギュラー・ドクターの介入を批判したのは、それによって女性の身体が損なわれると観察していたからだが、「女性⁽¹⁾は自分⁽²⁾、自身⁽³⁾の医者⁽⁴⁾、そして、お互い⁽⁵⁾の医者⁽⁶⁾となるべきだ⁽⁷⁾」という「セルフ・ヘルプ」の考え方も医者否定の理由であった。この「セルフ・ヘルプ」の精神がふつうハイドロパシーの特徴として挙げられるものであり、これはその限りで「すべてのふつうの人々が自分自身の医者になる⁽⁸⁾」ことを標榜して旗揚げしたトムソニアニズムにも共通するものである。その基本的態度としてハイドロパシーは「自分を知ること (self-knowledge)」や「自己信頼 (self-reliance)」を強調していた⁽⁹⁾。

しかし、「自分を知る」と言いながら、実際のハイドロパシーの諸言説はそれを自ら裏切る傾向にある。たとえば、かつて産婆の時代に産婦自身⁽¹⁰⁾が、出産の本当の時を知るためにこそ「本物の痛み」が重要な鍵とされていたのとは対照的に、ハイドロパシーは「痛み」を「不健康」の兆候として否定した。「自己信頼」を勧めたハイドロパシーが力を注いだのは、むしろ、専門家の処方箋にしたがって規制的習慣を身につけさせることであつた。じつさい、水治療所を「学校」あるいは「教育的なもの」にしようとしたシューは、⁽¹¹⁾「自己信頼」し自分で考えることを促す言説を紡ぎ出そうとはしていない。トロールは、ハイドロパシーの女医は「医者であるだけではなく『教師 (teacher)』でもある⁽¹²⁾」と述べていたが、それは、「医者⇨教師/患者⇨生徒」という分業を示唆し、トムソニアニズムでは否定されていた専門職化へと大きく一步を踏み出すものだったのである。

こうした出産における「主体性」言説とその不断の空洞化は、援助者を選別し限定する傾向とパラレルである。シューは一方で、女たちに「互いの医者」となることを求めたが、他方で、「(出産に集まる)おしゃべりな女たち (gossiping women) の言うことなどに耳をかしてはいけない」と言い切り、かつてゴシップと呼ばれた親戚や近隣の女たちそして産婆を「へ弱々しく無知で迷信深い」女たち」と批判的に表現した。⁽¹³⁾ 女たちが専門的知識の有無にかかわらず産婦の家に集まり、台所で食物やハーブを用意したかつての出産の情景の再現は否定された。産婆は女医にとつて代わられ、ゴシップもまた排除さ

れた。そして、エリート的アソシエーションのメンバー資格をもつ者のみが出産の正式参加者となったのである。結果として、ふつうの女たちは、癒しをトータルに担うことからは除外された。

さらに、植民地時代アメリカではけっして一般的ではなかった夫の付き添いが、ハイドロパシーにおいては推奨される。それは、身体の心地よさのみならず精神的安定を与えることとされる水浴の援助を、とくに夫の役割としたことに顕著にあらわれている。十九世紀アメリカでは出産に夫が付き添うことが流行となったが、それでも夫は「精神的支え」を与えられていた。⁽⁴⁶⁾これが、ふつうの女たちの共同性の衰退と核家族の席卷とに符合するものであることは、容易に理解される。こうして、出産における「自己 (self)」は、これが宣揚される下で、その基盤の脆弱性を露呈することとなった。それは、つねにすでに専門家的処方箋への従属に晒されており、それを支える人間関係も選民的・核家族的なものへと縮減されたものであった。

3 通過儀礼の遍在化と〈母〉の矛盾

ハイドロパシーの第三の特徴は、とりあえず出産や病気に照準を定められた規制的養生術がその限定を越えて軽々といわば生涯化する点に認められる。「産前の準備治療」は、少女の頃から始めた方が効果があり、子育てが終わった後も続けて一生を通じて実践することが望ましい。ハイドロパシーの目的は、「患者の現在の病弱を治すことのみならず生活様式 (the way of life) を教えること」であり、「患者たちが賢明にも〈よりよい方法〉を愛し永遠に実践するよう促すこと」⁽⁴⁷⁾へと広げられていた。〈よりよい方法〉を体得すれば、ライフサイクルにおける様々な危機をも渡っていけるはずだ。こうして、かつては女の仲間たちと臨んだ出産の通過儀礼的性格は、なべてライフコースの中に遍在せしめられることになる。生きるプロセスそのものが規制的養生の過程となり、それが「健康な母」として家庭に貢献する道なのである。

しかしながら、たとえ「健康な母」の製造に成功したとしても、彼女は幸せな家庭の要として充実した人生を送るとはかぎらない。現実には、核家族化した生活の中で終日子育ての責任を一人背負う不安もしばしば吐露されていた。⁽⁴⁹⁾一人の

女がただ母・妻として生きてゆくことも容易ではなかった。ハリエット・ビーチャー・ストウは言っている。

母親であることは、何と僅かな慰めしかもたらさなかったことでしょう。私が考えていたことは全て妨害され、⁽⁵⁰⁾私の道は常に閉ざされてきたのです。：「神は私に」家族は私の主な使命ではないということを教えて下さいました。

ストウ夫人は、十年間に五人の子どもを産み育てたが、育児と家庭生活に疲れ、一八四六年から一年半ヴァーモント州の水治療所に滞在した。そこで、十一回目の結婚記念日に夫のカルビン・ストウに書き送ったのがこの手紙である。

ハイドロパシーは基本的には、ドメステイシティーをとおして自己実現をめざす女たちに、「健康」や「母」であることの実現を自らに強いる規制的自己形成主体の像を提示しアピールするものであった。しかし、「身体と精神を縛りつけている手かせ・足かせを投げ捨て」そして「新しい生活を目指さない。」⁽²⁶⁾というハイドロパシストの励ましは、皮肉にも、実生活に潜む矛盾やゆがみを発見させることにもなった。水治療は、絶え間なくリフォームを渴望することによる強迫感と自己満足のあいだを揺れ動き、自分を監視する視線を一生を通じて内在化するシステムではあったが、現実の水治療所は、そうした緊張感に疲れ、家庭で母・妻役割の重責と孤独を感じていた女たちが、悩みを打ち明け合いともに水浴する癒しの場を提供するものでもあった。とはいえ、その水治療所の理想的形態は、シューによれば、「患者にとって《家庭 HOME》——身体的にも、モラルのうえでも、心の面でも、社会的な意味でも——すべての意味で家庭⁽⁵¹⁾」であった。水治療所に救いを求める彼女たちを待っていたのも、水治療所Ⅱ「学校」Ⅱ「家庭」と表現された規制的養生の生涯化を要請する規律空間にかわりはなかつたのである。

おわりに

かくて、出産の医学化プロセスにおいて、レギュラー・ドクターに対抗して成立したハイドロパシーは、出産を「浄化

の時」として位置づけた。しかし、それは、伝統的産婆世界と絶縁し、「水道水」に象徴される文明化・都市化に支えられてかろうじて存立するものだったのであり、そこでは、女たちのドメスティック・フェミニズムは、現実の家庭からの避難所を水治療所に求めることに帰結することとなった。だが、そこも規律化される空間であり、飼い馴ら(domesticate)された「自己実現」に呪縛される類のものだったのである。

註

- (1) Ryan, M. P., *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity 1830-1860*, New York/London: Harrington Park Press, 1985
- (2) Leavitt, J. W., *Brought to Bed: Childbearing in America 1750-1950*, Oxford U. P., 1986
- (3) Bogdan, Janet, "Childbirth in America, 1650 to 1990", in Apple, Rima D. ed., *Women, Health, and Medicine in America*, Rutgers University Press, 1992 [1990], pp. 101-120
- (4) 鈴木七美「アメリカ出産史研究の諸課題—19世紀植物治療運動と水治療運動の意義」お茶の水女子大学人間文化研究科「人間文化研究年報」第17号、一九九四年、二〇二—二一頁
- (5) Gevitz, N. ed., *Other Healers: Unorthodox Medicine in America*, The Johns Hopkins U. P., 1988
- (6) 鈴木七美「19世紀アメリカにおける『自然出産』運動、植物治療運動と水治療運動における出産・『自然』・人間関係」日本民族学会『民族学研究』第58巻4号、一九九四年、三五六—三八一頁
- (7) Legan, M. S., "Hydrophathy, or the Water-Cure", in Wrobel, A. ed., *Pseudo-Science and Society in Nineteenth-Century America*, The University Press of Kentucky, 1987, pp. 74-99; Donegan, J. B., "Hydrophathic Highway to Health": *Women and Water-Cure in Antebellum America*, New York: Greenwood Press, 1986; Cayleff, S. E., *Wash and Be Healed: The Water-Cure Movement and Women's Health*, Philadelphia: Temple University Press, 1987. ♪ネガンのハイドロパシー評価の図式は、「正統医療が出産をかつての自然的過程からひき離そうとした時代に、ハイドロパシストたちは出産に元来の意義を再付与しようとした。」(Donegan, op. cit., p. 78) というものである。そこには、過渡期的性格

その論議の中心は、女性の健康と美しさをめぐってのものである。

- (80) Cayleff, op. cit., p. 21 ; Donegan, op. cit., p. 19
- (81) Nichols, T. L., "The War of the Pathies", *Water-Cure Journal* [水療雑誌] Vol. 11, 1851, p. 150
- (82) Cassedy, James H., *Medicine in America*, Baltimore/London : The Johns Hopkins U. P., 1991, p. 37
- (83) Shew, Joel, *The Hydropathic Family Physician*, 1854, pp. 805-806
- (84) Cassedy, op. cit., pp. 35-36
- (85) Trall, Russell T., "Allopathic Midwifery", *WCJ*, Vol. 9, 1850, p. 121
- (86) Leavitt, op. cit., pp. 43-47
- (87) Nichols, Mary, *Experience in Water Cure*, 1851, p. 74
- (88) Gardner, Augustus K., "Physical Decline of American Women", *WCJ*, Vol. 22, 1860, p. 35
- (89) Austin, Harriet N., "Woman's Present and Future", *WCJ*, Vol. 16, 1853, p. 57
- (90) Lasselle, N. F., "Woman's Rights", *WCJ*, Vol. 11, 1851, p. 45
- (91) Austin, "Letter No. 16", *WCJ*, Vol. 27, 1859, p. 69
- (92) "Hints Toward Physical Perfection ; or How to Acquire and Retain Beauty, Grace, and Strength, and Secure Long Life and Continued Youthfulness : VI, Childhood", *WCJ*, Vol. 24, 1857, p. 77
- (93) *Ibid.*, p. 77
- (94) *Ibid.*, p. 77
- (95) *Ibid.*, pp. 77-79
- (96) *Ibid.*, p. 79
- (97) "The Dress of Women and Children", *Sibyl*, 1, 1856, p. 76 (Donegan, op. cit., p. 164)
- (98) Selby, Sarah E., "A Bloomer to Her Sisters", *WCJ*, Vol. 15, 1853, p. 131
- (99) Gross, M. M., quoted in Siklar, Kathryn Kish, "All Hail to Pure Cold Water!" *American Heritage*, 26, 1974, p. 67

- (Leavitt, ed., *Women and Health in America*, p. 249)
- (28) Shew, "Facts and Observations Concerning Midwifery", *WCJ*, Vol. 9, 1850, p. 150
- (29) Nichols, T., *The Curse Removed*, 1850, pp. 6-9
- (30) Trall, *The Hydropathic Encyclopedia*, Vol. 2, 1852, p. 461
- (31) Aristotle (pseud.), *The Works of Aristotle, The Famous Philosopher*, New England, 1813, pp. 103-104. また、鈴木七美「擬アリストテレス産婆術書の系譜学」『近代イギリス家庭教育論史研究』(平成5-6年度科学研究費補助金研究成果報告書、一般研究(C))、研究代表者・寺崎弘昭)一九九五年、三一-五四頁、参照。
- (32) Day, L. Meeker, *The Botanic Family Physician*, New York, 1833, pp. 20-21
- (33) Holbrook, M. L., *Parturition Without Pain*, 1871, p. 11 (Donegan, op. cit., p. 95)
- (34) Nichols, T., "Practice in Water-Cure", *WCJ*, Vol. 10, 1850, p. 189
- (35) *Ibid.*, p. 190
- (36) Shew, "Facts and Observations Concerning Midwifery", *WCJ*, Vol. 9, 1850, p. 150
- (37) Shew, "Twelve Cases in Midwifery", *WCJ*, Vol. 11, 1851, p. 64
- (38) Shew, *Water-Cure in Pregnancy and Childbirth*, 1849, pp. 95-102
- (39) Shew, *Hydropathic Family Physician*, 1854, p. 803
- (40) Blake, Nelson Manfred, *Water for the Cities: A History of the Urban Water Supply Problem in the United States*, Syracuse University Press, 1956, pp. 121-171
- (41) Nichols, Thomas, "Diseases of Women", *WCJ*, Vol. 11, 1851, p. 122
- (42) *Boston Thomsonian Manual*, 3, 1837, p. 21 (Kett, J., *The Formation of the American Medical Profession*, Yale University Press, 1968, p. 107)
- (43) Shew, Marie L., *Water Cure for Ladies*, New York, 1844, p. 156 (Donegan, op. cit., pp. 86, 91)
- (44) Trall, "November Topics", *WCJ*, Vol. 20, 1855, p. 109

- (45) Shew, *Children, Their Hydropathic Management in Health and Disease*, 1852, p. 46 ; p. 53
- (46) Sutor, J. J., "Husbands' Participation in Childbirth : A Nineteenth-Century Phenomenon", *Journal of Family History*, 1981, pp. 278-293
- (47) Trall, *Hydropathic Encyclopedia*, p. 399
- (48) 出産の通過儀礼の意味と関つては、Wilson, A., "The ceremony of childbirth and its interpretation", in Fildes, V. ed., *Women as Mothers in Pre-industrial England*, Routledge, 1990, pp. 68-98
- (49) Dye, Nancy S. and Smith, Daniel S., "Mother Love and Infant Death, 1750-1920", *Journal of American History*, 73, 1986, p. 343
- (50) Harriet Beecher Stowe to Calvin Stowe, January 1, 1847, Harriet Beecher Stowe Papers, (Degler, C. N., *At Odds*, Oxford U. P., 1980, p. 63)
- (51) Shew, *The Hydropathic Family Physician*, 1854, p. 806
- (52) 寺崎弘昭「へ子ともくと教育」といふアポリア——眺望台としての一七世紀近代市民社会理論」『現代思想』一九九六年六月、二〇五頁

(川村学園女子大学・医の歴史人類学)